

雞陳言多不載愚

狀併下向々顏之

時可憐散候也

御子細候別覽

爲悅候抑上洛
已後者雖便宜

多候不詳恩問
不為獻愚

故郷候き而
者



評註
徒然草新講 目次

·扉表·裏

評註
徒然草新講 目次

本系圖文

つれづれなるままに……一八
いでや此の世に生まれて

は.....一八
いにしへの聖の御代の.....二四

よろづにいみじくとも……二五
後の世の事……………二六

第五章 武段 不幸に懲りしつめる人の三一七
わが身のやんごとなから
んても

第八段	あだし野の露	三〇
世の人の心惑はす事		三三

第六十九段 女は髪のめでたからんこそ

第十一段 家居のつきづきしく…………三六
神無月の頃…………四〇

目次

次

卷之三

七言律詩

送人歸京

北漢王

故都舊物盡淒涼
一見衣冠已斷腸
身在山河空北望
心知風雨急南翔
馬頭風急雲飛急
人面秋悲葉落悲
誰道長安無故舊
只愁胡馬到關西

—兼好法師筆懸紙及書状の一部— (武藏金沢稱名寺藏)



目次

たるに	世の中にその頃人の……	七八
今様の事どもの……	七九	
何事も入り立たぬ様……	八〇	
人毎に我が身にうとき……	八一	
屏風障子などの……	八四	
うすものの表紙は……	八五	
竹林院の入道左大臣殿……	八七	
法顯三藏の……	八九	
人の心すなほならねば……	九〇	
惟繼の中納言は……	九二	
下部に酒飲まる事は……	九四	
或者し小野道風の書ける……	九八	
奥山に猫またといふも	一九八	
の…………	一九九	
大納言法印の…………	二〇二	
赤舌目といふ事……	二〇三	
或人弓射る事をならぶ	二〇五	
牛を賣る者あり	二〇八	
常磐井の相國	一一一	
箱のくりかたに……	一一三	
めなもみといふ草……	一二四	
其の物に附きて……	一二五	
たふとき聖のいひ置き	一二六	
第九十八段	一九三	
第九十九段	一九四	
第百一十六段	一九五	
第百一十七段	一九六	
第百一十八段	一九七	
第九十九段	一九八	
第百一十九段	一九九	
第百二十段	二〇〇	

第九十九段	堀川の相國は……
第一百段	久我ノ相國は……
第一百一 段	或人任大臣の節會の……
第一百二 段	尹ノ大納言光忠入道……
第一百三 段	大覺寺殿にて……
第一百四 段	荒れたる宿の人目無きに……
第一百五 段	北の屋かげに……
第一百六 段	高野の證空上人……
第一百七 段	女の物いひかけたる返事……
第一百八 段	寸陰惜しむ人なし……
第一百九 段	高名の木のぼり……
第一百十 段	雙六の上手といひ人
第一百一 段	圓基雙六好みて……
第一百二 段	明日は遠國へ……
第一百三 段	四十にも餘りぬる人の……
第一百四 段	今田川のおほい殿……
第一百五 段	宿河原といふ所にて……
第一百六 段	寺院の號……
第一百七 段	友とするに……
第一百八 段	鯉のあつもの食ひたる

目次



第六十六段	人間の譬みあへるわざ	四六八
第六十七段	大道に携はる人	三五〇
第六十八段	年老いたる人の	三五三
第六十九段	何事の式といふ事は	三五六
第七十段	さしたる事なくて	三五七
第七十一段	貝を覆ふ人の	三五九
第七十二段	若き時は	三六一
第七十三段	小野ノ小町が事	三六四
第七十四段	小鷹によき犬	三六五
第七十五段	世には心得ぬ事の	三六七
第七十六段	黒戸は	三七六
第七十七段	鎌倉の中書王にて	三七六
第七十八段	或所の侍ども	三七八
第七十九段	入宋の沙門道眼上人	三八〇
第八十段	人づく牛をば	三八五
第八十一段	さぎちやうは	三八二
第八十二段	ふれふれこゆき	三八三
第八十三段	四條大納言隆親卿	三八四
第八十四段	相模守時頼の母は	三八五
第八十五段	城ノ陸奥守ノ泰盛は	三八八
第八十六段	吉田と申す馬乗の	三八九
第八十七段	或者子を法師になして	三九〇
第八十八段	今日は其の事を	三九九

第一百九十一段	妻といふものこそ	四〇一
第一百九十二段	夜に入りて	四〇三
第一百九十三段	神佛にも人のままでぬ	四〇五
第一百九十四段	日	四〇六
第一百九十五段	くらき人の	四〇七
第一百九十六段	達人の人を見る眼は	四〇七
第一百九十七段	或久我纏手を通りけ	四一〇
第一百九十八段	るに	四一〇
第一百九十九段	東大寺の神輿	四一二
第二百一 段	諸寺の僧のみにもあら	四一五
第二百二 段	ず	四一五
第二百三 段	揚名の介に限らず	四一四
第二百四 段	横川の行宣法印が	四一五
第二百五 段	吳竹は葉細く	四一五
第二百六 段	退凡下乘の率都婆	四一六
第二百七 段	十月を神無月といひ	四一七
第二百八 段	て	四一七
第二百九 段	犯人を笞にて	四一八
第二百十 段	比叡山に大師勧請の	四二〇
第二百十一 段	徳大寺の故大臣殿	四二二
第二百十二 段	龜山殿建てられんと	四二三
第二百十三 段	經文などの紐をゆふに	四二五
第二百十四 段	人の田を論ずるもの	四二六
第二百十五 段	四二七	四二七

第一百十九段	鎌倉の海にかつをとい	二五八
第一百二十段	唐の物は	二五九
第一百二十一段	養ひ飼ふ物には	二六〇
第一百二十二段	人の才能は	二六二
第一百二十三段	無益の事をなして	二六四
第一百二十四段	改めて益なき事は	二六六
第一百二十五段	是法法師は	二六六
第一百二十六段	雅房の大納言は	二七〇
第一百二十七段	頬回は	二七三
第一百二十八段	物に争はず	二七五
第一百二十九段	貧しき者は	二七八
第一百三十段	鳥羽の作り道は	二八〇
第一百三十二段	夜の御殿は	二八〇
第一百三十三段	高倉院の法華堂の三昧	二八〇
第一百三十四段	僧	二八〇
第一百三十五段	貧季の大納言入道	二八二
第一百三十六段	祭過ぎぬれば	二八六
第一百三十七段	家にありたき木は	二九〇
第一百三十八段	身死して財残る事は	二九一
第一百三十九段	悲田院の堯連上人は	二九一
第一百四十段	西大寺の静然上人	二九一
第一百四十一段	爲兼の大納言入道	二九一
第一百四十二段	鹿革を鼻にあてて	二九一
第一百四十三段	能をつかんとする人	二九一
第一百四十四段	或人のいはく	二九一
第一百四十五段	西大寺の静然上人	二九一
第一百四十六段	明雲座主	二九一
第一百四十七段	御隨身秦の重躬	二九一
第一百四十八段	灸治あまた所になりぬ	二九一
第一百四十九段	四十以後の人	二九一
第一百五十段	鹿革を鼻にあてて	二九一
第一百五十一段	能をつかんとする人	二九一
第一百五十二段	或人のいはく	二九一
第一百五十三段	西大寺の静然上人	二九一
第一百五十四段	明雲座主	二九一
第一百五十五段	御隨身秦の重躬	二九一
第一百五十六段	灸治あまた所になりぬ	二九一
第一百五十七段	四十以後の人	二九一
第一百五十八段	鹿革を鼻にあてて	二九一
第一百五十九段	能をつかんとする人	二九一
第一百六十段	或人のいはく	二九一
第一百六十一段	西大寺の静然上人	二九一
第一百六十二段	明雲座主	二九一
第一百六十三段	御隨身秦の重躬	二九一
第一百六十四段	灸治あまた所になりぬ	二九一
第一百六十五段	四十以後の人	二九一
第一百六十六段	鹿革を鼻にあてて	二九一
第一百六十七段	能をつかんとする人	二九一
第一百六十八段	或人のいはく	二九一
第一百六十九段	西大寺の静然上人	二九一
第一百七十段	明雲座主	二九一
第一百七十一段	御隨身秦の重躬	二九一
第一百七十二段	灸治あまた所になりぬ	二九一
第一百七十三段	四十以後の人	二九一
第一百七十四段	鹿革を鼻にあてて	二九一
第一百七十五段	能をつかんとする人	二九一
第一百七十六段	或人のいはく	二九一
第一百七十七段	西大寺の静然上人	二九一
第一百七十八段	明雲座主	二九一
第一百七十九段	御隨身秦の重躬	二九一
第一百八十段	灸治あまた所になりぬ	二九一
第一百八十一段	四十以後の人	二九一
第一百八十二段	鹿革を鼻にあてて	二九一
第一百八十三段	能をつかんとする人	二九一
第一百八十四段	或人のいはく	二九一
第一百八十五段	西大寺の静然上人	二九一
第一百八十六段	明雲座主	二九一
第一百八十七段	御隨身秦の重躬	二九一
第一百八十八段	灸治あまた所になりぬ	二九一
第一百八十九段	四十以後の人	二九一
第一百九〇段	鹿革を鼻にあてて	二九一
第一百九十一段	能をつかんとする人	二九一
第一百九十二段	或人のいはく	二九一
第一百九十三段	西大寺の静然上人	二九一
第一百九十四段	明雲座主	二九一
第一百九十五段	御隨身秦の重躬	二九一
第一百九十六段	灸治あまた所になりぬ	二九一
第一百九十七段	四十以後の人	二九一
第一百九十八段	鹿革を鼻にあてて	二九一
第一百九十九段	能をつかんとする人	二九一
第二百一 段	或人のいはく	二九一
第二百二 段	西大寺の静然上人	二九一
第二百三 段	明雲座主	二九一
第二百四 段	御隨身秦の重躬	二九一
第二百五 段	灸治あまた所になりぬ	二九一
第二百六 段	四十以後の人	二九一
第二百七 段	鹿革を鼻にあてて	二九一
第二百八 段	能をつかんとする人	二九一
第二百九 段	或人のいはく	二九一
第二百十 段	西大寺の静然上人	二九一
第二百十一 段	明雲座主	二九一
第二百十二 段	御隨身秦の重躬	二九一
第二百十三 段	灸治あまた所になりぬ	二九一
第二百十四 段	四十以後の人	二九一
第二百十五 段	鹿革を鼻にあてて	二九一
第二百十六 段	能をつかんとする人	二九一
第二百十七 段	或人のいはく	二九一
第二百十八 段	西大寺の静然上人	二九一
第二百十九 段	明雲座主	二九一
第二百二十 段	御隨身秦の重躬	二九一
第二百二十一 段	灸治あまた所になりぬ	二九一
第二百二十二 段	四十以後の人	二九一
第二百二十三 段	鹿革を鼻にあてて	二九一
第二百二十四 段	能をつかんとする人	二九一
第二百二十五 段	或人のいはく	二九一
第二百二十六 段	西大寺の静然上人	二九一
第二百二十七 段	明雲座主	二九一
第二百二十八 段	御隨身秦の重躬	二九一
第二百二十九 段	灸治あまた所になりぬ	二九一
第二百三十 段	四十以後の人	二九一
第二百三十一 段	鹿革を鼻にあてて	二九一
第二百三十二 段	能をつかんとする人	二九一
第二百三十三 段	或人のいはく	二九一
第二百三十四 段	西大寺の静然上人	二九一
第二百三十五 段	明雲座主	二九一
第二百三十六 段	御隨身秦の重躬	二九一
第二百三十七 段	灸治あまた所になりぬ	二九一
第二百三十八 段	四十以後の人	二九一
第二百三十九 段	鹿革を鼻にあてて	二九一
第二百四十 段	能をつかんとする人	二九一
第二百四十一 段	或人のいはく	二九一
第二百四十二 段	西大寺の静然上人	二九一
第二百四十三 段	明雲座主	二九一
第二百四十四 段	御隨身秦の重躬	二九一
第二百四十五 段	灸治あまた所になりぬ	二九一
第二百四十六 段	四十以後の人	二九一
第二百四十七 段	鹿革を鼻にあてて	二九一
第二百四十八 段	能をつかんとする人	二九一
第二百四十九 段	或人のいはく	二九一
第二百五十 段	西大寺の静然上人	二九一
第二百五十一 段	明雲座主	二九一
第二百五十二 段	御隨身秦の重躬	二九一
第二百五十三 段	灸治あまた所になりぬ	二九一
第二百五十四 段	四十以後の人	二九一
第二百五十五 段	鹿革を鼻にあてて	二九一
第二百五十六 段	能をつかんとする人	二九一
第二百五十七 段	或人のいはく	二九一
第二百五十八 段	西大寺の静然上人	二九一
第二百五十九 段	明雲座主	二九一
第二百六十 段	御隨身秦の重躬	二九一
第二百六十一 段	灸治あまた所になりぬ	二九一
第二百六十二 段	四十以後の人	二九一
第二百六十三 段	鹿革を鼻にあてて	二九一
第二百六十四 段	能をつかんとする人	二九一
第二百六十五 段	或人のいはく	二九一
第二百六十六 段	西大寺の静然上人	二九一
第二百六十七 段	明雲座主	二九一
第二百六十八 段	御隨身秦の重躬	二九一
第二百六十九 段	灸治あまた所になりぬ	二九一
第二百七十 段	四十以後の人	二九一
第二百七十一 段	鹿革を鼻にあてて	二九一
第二百七十二 段	能をつかんとする人	二九一
第二百七十三 段	或人のいはく	二九一
第二百七十四 段	西大寺の静然上人	二九一
第二百七十五 段	明雲座主	二九一
第二百七十六 段	御隨身秦の重躬	二九一
第二百七十七 段	灸治あまた所になりぬ	二九一
第二百七十八 段	四十以後の人	二九一
第二百七十九 段	鹿革を鼻にあてて	二九一
第二百八十 段	能をつかんとする人	二九一
第二百八十一 段	或人のいはく	二九一
第二百八十二 段	西大寺の静然上人	二九一
第二百八十三 段	明雲座主	二九一
第二百八十四 段	御隨身秦の重躬	二九一
第二百八十五 段	灸治あまた所になりぬ	二九一
第二百八十六 段	四十以後の人	二九一
第二百八十七 段	鹿革を鼻にあてて	二九一
第二百八十八 段	能をつかんとする人	二九一
第二百八十九 段	或人のいはく	二九一
第二百九十 段	西大寺の静然上人	二九一
第二百九十一 段	明雲座主	二九一
第二百九十二 段	御隨身秦の重躬	二九一
第二百九十三 段	灸治あまた所になりぬ	二九一
第二百九十四 段	四十以後の人	二九一
第二百九十五 段	鹿革を鼻にあてて	二九一
第二百九十六 段	能をつかんとする人	二九一
第二百九十七 段	或人のいはく	二九一
第二百九十八 段	西大寺の静然上人	二九一
第二百九十九 段	明雲座主	二九一
第二百二十 段	御隨身秦の重躬	二九一
第二百二十一 段	灸治あまた所になりぬ	二九一
第二百二十二 段	四十以後の人	二九一
第二百二十三 段	鹿革を鼻にあてて	二九一
第二百二十四 段	能をつかんとする人	二九一
第二百二十五 段	或人のいはく	二九一
第二百二十六 段	西大寺の静然上人	二九一
第二百二十七 段	明雲座主	二九一
第二百二十八 段	御隨身秦の重躬	二九一
第二百二十九 段	灸治あまた所になりぬ	二九一
第二百三十 段	四十以後の人	二九一
第二百三十一 段	鹿革を鼻にあてて	二九一
第二百三十二 段	能をつかんとする人	二九一
第二百三十三 段	或人のいはく	二九一
第二百三十四 段	西大寺の静然上人	二九一
第二百三十五 段	明雲座主	二九一
第二百三十六 段	御隨身秦の重躬	二九一
第二百三十七 段	灸治あまた所になりぬ	二九一
第二百三十八 段	四十以後の人	二九一
第二百三十九 段	鹿革を鼻にあてて	二九一
第二百四十 段	能をつかんとする人	二九一
第二百四十一 段	或人のいはく	二九一
第二百四十二 段	西大寺の静然上人	二九一
第二百四十三 段	明雲座主	二九一
第二百四十四 段	御隨身秦の重躬	二九一
第二百四十五 段	灸治あまた所になりぬ	二九一
第二百四十六 段	四十以後の人	二九一
第二百四十七 段	鹿革を鼻にあてて	二九一
第二百四十八 段	能をつかんとする人	二九一
第二百四十九 段	或人のいはく	二九一
第二百五十 段	西大寺の静然上人	二九一
第二百五十一 段	明雲座主	二九一
第二百五十二 段	御隨身秦の重躬	二九一
第二百五十三 段	灸治あまた所になりぬ	二九一
第二百五十四 段	四十以後の人	二九一
第二百五十五 段	鹿革を鼻にあてて	二九一
第二百五十六 段	能をつかんとする人	二九一
第二百五十七 段	或人のいはく	二九一
第二百五十八 段	西大寺の静然上人	二九一
第二百五十九 段	明雲座主	二九一
第二百六十 段	御隨身秦の重躬	二九一
第二百六十一 段	灸治あまた所になりぬ	二九一
第二百六十二 段	四十以後の人	二九一
第二百六十三 段	鹿革を鼻にあてて	二九一
第二百六十四 段	能をつかんとする人	二九一
第二百六十五 段	或人のいはく	二九一
第二百六十六 段	西大寺の静然上人	二九一
第二百六十七 段	明雲座主	二九一
第二百六十八 段	御隨身秦の重躬	二九一
第二百六十九 段	灸治あまた所になりぬ	二九一
第二百七十 段	四十以後の人	二九一
第二百七十一 段	鹿革を鼻にあてて	二九一
第二百七十二 段	能をつかんとする人	二九一
第二百七十三 段	或人のいはく	二九一
第二百七十四 段	西大寺の静然上人	二九一
第二百七十五 段	明雲座主	二九一
第二百七十六 段	御隨身秦の重躬	二九一
第二百七十七 段	灸治あまた所になりぬ	二九一
第二百七十八 段	四十以後の人	二九一
第二百七十九 段	鹿革を鼻にあてて	二九一
第二百八十 段	能をつかんとする人	二九一
第二百八十一 段	或人のいはく	二九一
第二百八十二 段	西大寺の静然上人	二九一
第二百八十三 段	明雲座主	二九一
第二百八十四 段	御隨身秦の重躬	二九一
第二百八十五 段	灸治あまた所になりぬ	二九一
第二百八十六 段	四十以後の人	二九一
第二百八十七 段	鹿革を鼻にあてて	二九一
第二百八十八 段	能をつかんとする人	二九一
第二百八十九 段	或人のいはく	二九一
第二百九十 段	西大寺の静然上人	二九一
第二百九十一 段	明雲座主	二九一
第二百九十二 段	御隨身秦の重躬	二九一
第二百九十三 段	灸治あまた所になりぬ	二九一
第二百九十四 段	四十以後の人	二九一
第二百九十五 段	鹿革を鼻にあてて	二九一
第二百九十六 段	能をつかんとする人	二九一
第二百九十七 段	或人のいはく	二九一
第二百九十八 段	西大寺の静然上人	二九一
第二百九十九 段	明雲座主	二九一
第二百二十 段	御隨身秦の重躬	二九一
第二百二十一 段	灸治あまた所になりぬ	二九一
第二百二十二 段	四十以後の人	二九一
第二百二十三 段	鹿革を鼻にあてて	二九一
第二百二十四 段	能をつかんとする人	二九一
第二百二十五 段	或人のいはく	二九一
第二百二十六 段	西大寺の静然上人	二九一
第二百二十七 段	明雲座主	二九一
第二百二十八 段	御隨身秦の重躬	二九一
第二百二十九 段	灸治あまた所になりぬ	二九一
第二百三十 段	四十以後の人	二九一
第二百三十一 段	鹿革を鼻にあてて	二九一
第二百三十二 段	能をつかんとする人	二九一
第二百三十三 段	或人のいはく	二九一
第二百三十四 段	西大寺の静然上人	二九一
第二百三十五 段	明雲座主	二九一
第二百三十六 段	御隨身秦の重躬	二九一
第二百三十七 段	灸治あまた所になりぬ	二九一
第二百三十八 段	四十以後の人	二九一
第二百三十九 段	鹿革を鼻にあてて	二九一
第二百四十 段	能をつかんとする人	二九一
第二百四十一 段	或人のいはく	二九一
第二百四十二 段	西大寺の静然上人	二九一
第二百四十三 段	明雲座主	二九一
第二百四十四 段	御隨身秦の重躬	二九一
第二百四十五 段	灸治あまた所になりぬ	二九一
第二百四十六 段	四十以後の人	二九一
第二百四十七 段	鹿革を鼻にあてて	二九一
第二百四十八 段	能をつかんとする人	二九一
第二百四十九 段	或人のいはく	二九一
第二百五十 段	西大寺の静然上人	二九一
第二百五十一 段	明雲座主	二九一
第二百五十二 段	御隨身秦の重躬	二九一
第二百五十三 段	灸治あまた所になりぬ	二九一
第二百五十四 段	四十以後の人	二九一
第二百五十五 段	鹿革を鼻にあてて	二九一
第二百五十六 段	能をつかんとする人	二九一
第二百五十七 段	或人のいはく	二九一
第二百五十八 段	西大寺の静然上人	二九一
第二百五十九 段	明雲座主	二九



第二百十一段	よろづの事はたのむべ	四二九
第二百十二段	からず	四二九
第二百十三段	秋の月は	四三二
第二百十四段	御前の火爐に	四三二
第二百十五段	想夫戀といふ樂は	四四四
第二百十六段	平ノ宣時朝臣	四三五
第二百十七段	最明寺ノ入道	四三七
第二百十八段	或大福長者のいはく	四三九
第二百十九段	狐は人に	四四四
第二百二十段	四條ノ黄門	四四五
第二百二十一段	何事も邊土は	四四九
第二百二十二段	建治弘安の頃は	四五一
第二百二十三段	竹谷の乘願房は	四五三
第二百二十四段	後鳥羽院の御時	四五五
第二百二十五段	多久賛が申しけるは	四五五
第二百二十六段	陰陽師有宗入道	四五五
第二百二十七段	多久賛が申しけるは	四五五
第二百二十八段	六時禮讀は	四六〇
第二百二十九段	千本の釋迦念佛は	四六一
第二百三十段	よき刷工は	四六一
第二百三十一段	五條内裏には	四六二
第二百三十二段	園の別當人道は	四六三
第二百三十三段	すべて人は	四六六
思はば	よろづのとがあらじと	四六八

第二百三十四段	人の物を問ひたるに	四六九
第二百三十五段	主ある家には	四七二
第二百三十六段	丹波に出雲といふ所	四七四
第二百三十七段	柳筥に据うるものには	四七七
第二百三十八段	御隨身近友が	四七八
第二百三十九段	八月十五日九月十三日	四九二
第二百四十段	しのぶの浦の蟹の見る	四九三
第二百四十一段	めも	四九三
第二百四十二段	望月のまどかなる事は	四九六
第二百四十三段	とこしなへに還願につ	四九九
第二百四十四段	かはるる事は	四九九
第二百四十五段	八つになりし年	五〇〇
第二百四十六段	語句索引	五〇三
第二百四十七段	宮城の図	五四三
第二百四十八段	内裏の図	五四四
第二百四十九段	京都附近図	五四五
第二百五十段	卷 捧絵図版目次	五四六
第二百五十一段	皇室及貴族の事ども	五四八
第二百五十二段	第一回	五四九
第二百五十三段	第二回	五四九
第二百五十四段	第三回	五四九
第二百五十五段	第四回	五四九
第二百五十六段	第五回	五四九
第二百五十七段	第六回	五四九
第二百五十八段	第七回	五四九
第二百五十九段	第八回	五四九
第二百六十段	第九回	五四九
第二百六十一段	第十回	五四九
第二百六十二段	第十一回	五四九
第二百六十三段	第十二回	五四九
第二百六十四段	第十三回	五四九
第二百六十五段	第十四回	五四九
第二百六十六段	第五回	五四九
第二百六十七段	第十六回	五四九
第二百六十八段	第十七回	五四九
第二百六十九段	第十八回	五四九
第二百七十段	第十九回	五四九
第二百七十一段	第二十回	五四九
第二百七十二段	第二十一回	五四九
第二百七十三段	第二十二回	五四九
第二百七十四段	第二十三回	五四九
第二百七十五段	第二十四回	五四九
第二百七十六段	第二十五回	五四九
第二百七十七段	第二十六回	五四九
第二百七十八段	第二十七回	五四九
第二百七十九段	第二十八回	五四九
第二百八十段	第二十九回	五四九
第二百八十一段	第三十回	五四九
第二百八十二段	第三十一回	五四九
第二百八十三段	第三十二回	五四九
第二百八十四段	第三十三回	五四九
第二百八十五段	第三十四回	五四九
第二百八十六段	第三十五回	五四九
第二百八十七段	第三十六回	五四九
第二百八十八段	第三十七回	五四九
第二百八十九段	第三十八回	五四九
第二百九十段	第三十九回	五四九
第二百九十一段	第四十回	五四九
第二百九十二段	第四十五回	五四九
第二百九十三段	第四十六回	五四九
第二百九十四段	第四十七回	五四九
第二百九十五段	第四十八回	五四九
第二百九十六段	第四十九回	五四九
第二百九十七段	第五十回	五四九
第二百九十八段	第五十五回	五四九
第二百九十九段	第五十六回	五四九
第二百三十段	第五十七回	五四九
第二百三十一段	第五十八回	五四九
第二百三十二段	第五十九回	五四九
第二百三十三段	第六十回	五四九
第二百三十四段	第六十五回	五四九
第二百三十五段	第六十六回	五四九
第二百三十六段	第六十七回	五四九
第二百三十七段	第六十八回	五四九
第二百三十八段	第六十九回	五四九
第二百三十九段	第七十回	五四九
第二百四十段	第七十一回	五四九
第二百四十一段	第七十二回	五四九
第二百四十二段	第七十三回	五四九
第二百四十三段	第七十四回	五四九
第二百四十四段	第七十五回	五四九
第二百四十五段	第七十六回	五四九
第二百四十六段	第七十七回	五四九
第二百四十七段	第七十八回	五四九
第二百四十八段	第七十九回	五四九
第二百四十九段	第八十回	五四九
第二百五十段	第八十一回	五四九
第二百五十一段	第八十二回	五四九
第二百五十二段	第八十三回	五四九
第二百五十三段	第八十四回	五四九
第二百五十四段	第八十五回	五四九
第二百五十五段	第八十六回	五四九
第二百五十六段	第八十七回	五四九
第二百五十七段	第八十八回	五四九
第二百五十八段	第八十九回	五四九
第二百五十九段	第九十回	五四九
第二百六十段	第九十五回	五四九
第二百六十一段	第九十六回	五四九
第二百六十二段	第九十七回	五四九
第二百六十三段	第九十八回	五四九
第二百六十四段	第九十九回	五四九
第二百六十五段	第一百回	五四九

目次

次

本書は旧著「つれぐ草通釈」（戰災のため絶版）の【通釈】の部を本とし、これに旧著の【釈】（語釈）の部を簡約して頭註とし、更に一段の大意を要約又は批評した【段意】の項を添えたものである。なお旧著では本文が別冊になっていたのであるが、このたびは最近校訂を加えて通常流布の本文よりもよほどよくなつたと自信する本文を、段或は節ごとに最初にかかげることとした。これら本文の添加や語釈の要約や、その他万端、慶野正次氏（兵庫県立明石高校教諭）にやつていただいた。又本書中一五〇図ほどの図版は、前田信氏（武藏野書院主人）の異常な御骨折の結果である。このお二人の御援助に対し、厚い感謝をささげるものである。

これで前著「つれぐ草通釈」よりは、ずっと普通の註釈書の体裁に近づいたのであるが、それでもまだ大分変った所がある。もつともそれはわるい方に変つてゐるのではないと信じてゐるが、とにかく變つているところがあるからには、一応説明して、読者諸君の御了解を願つておく必要があろう。

諸君が【通釈】の文を読んで第一に気のつくことは「」にはいった部分がかなり多いこと、

序 段

徒然なるままで、日ぐらし硯にむかひて、心にうつりゆくよしなしごとをそこはかとなく書きつければ、あやしうこそものぐるほしけれ。

【通釈】手持不沙汰なのにまかせて、終日硯に對つて、心「ノ鏡」に映つて「ハ消エ、映ッテハ消エシテ」行くやくにも立たぬむだごとを、とりとめもなく書きつけたところが、「ソノ書ケタモノハ」ほんとうにへんに、わけもわからぬものであるわ。

【段意】終日執筆した何枚かの原稿を更に読み直してみて、その感想を書いていにしてあるが、実は全篇の序である。

第一 段

○いでや 話しはじめにいう語であるが、はりきつて言い出すのでなく、ひかえめな氣分でいう感動詞。

○多かんめれ 多かる

* いでや、この世にうまれては、願はしかるべき事こそ多かんめれ。御門の御位はいともかしこし。竹の園生の末葉まで、人間の種ならぬぞやんごとなき。* 一個人の御有様はさらなり。ただ人々、舍人など賜はるきは

はゆゆしと見ゆ。其の子孫までは、はふれにたれど、なほなまめかし。それよりしもつかたは、程につけつつ、時にあひ、したり顔なるも、みづからはいみじと思ふらめど、いとくちをし。

【通釈】いやどうも「人ガ」此の世の中に生れて来たからには、誰しも願わしいような事が多いであろう。〔願ワシイ事トイエバ、先ズ第一ニ家柄ノヨイコトデアルガ、サリトテ〕

天子様の御位は「コレヲ彼是申スノハ」まことにどうも、もつたいない。「イヤ、天子様バカリデハナイ」孫王様までも、人間界の御胤

ないことは、まことに貴い事である。〔イチノヒトの御生活はいうまでないこと、攝関以外の家家でも近衛舍人などを下される身分の人はずばらしいものに思われる。その〔攝関家ヤ、



舍人(隨身・番長)
(国立博物館藏隨身庭騎図)

○竹の園生 天皇の子即ち親王の別称。

○末葉 子のこと。即ち「竹の子」で天皇の孫までの意。シソンといふ意ではない。

○人間 人間界の意。なおこの句は大江朝綱が醍醐帝の孫源保光を始めた詩句「此花は是人間の種にあらず」からとった。

○一人の人 摄政関白になる家の柄。九條二條一條近衛鷹司の五家。○舍人など賜はるきは舍人は近衛府の下級武官たち。又隨身(ズイジン)。「賜はる」は、天皇が攝関又は元老を優遇の恩召で特に勅して近衛の下級官をして出入を警衛させるなどである。當時攝國家以外で出

う。當時攝國家以外で出を警衛させるなどである。當時攝國家以外で出を警衛させるなどである。